イスラーム世界研究　第 15 巻（2022 年 3 月）138–148 頁
Kyoto Bulletin of Islamic Area Studies, 15 (March 2022), pp.138–148

イスラーム聖者信仰研究とその周辺
――四つの対比から――

赤堀　雅幸*

Four Contrasts for Thinking about the Study of Islamic Saint Veneration and Its Surroundings

AKAHORI Masayuki

The paper discusses four contrasts in order to highlight some points that should be paid attention to in order to develop the study of Islamic saint veneration in an interdisciplinary manner, taking into account its relationship with Sufism and ṭarīqa. The four contrasts are “God and saints,” “prophets and saints,” “saints and holy relics,” and “saints and grace.” In “God and saints,” we see the opposition and complementarity between the two, which can be explained in the contrasting terms of “worship” and “veneration.” “Prophets and saints” examines the difference between “revelation” and “miracle” as the medium between God and man. In “saints and holy relics,” I focus on the connection to the recently developed anthropology of objects, and call attention to the potentially blurred boundaries between humans and objects. The final section, “saints and grace,” discusses holiness in terms of its visibility and invisibility. In conclusion, while acknowledging that the saint is a concept of Christian origin, I point out that it does not matter as it is very normal for many other analytic concepts; what is important is to determine the validity and limitations of the “saint” as an analytic concept. In addition, I will argue the importance of advancing the study of saint veneration through a circuitous process of individual case studies and general attempts at theorizing, with the aim of using analogous concepts to enable interdisciplinary inquiry and broaden theoretical perspectives.

1．はじめに――課題の所在

聖者信仰をめぐる研究は、それなりの積み重ねを有しながらも、イスラームについての主要な研究課題とされてきたわけではない。その点については日本でイスラーム全般について最初に編まれた研究案内といえる『イスラーム研究ハンドブック』において、「『聖者』と『聖者崇拝』」を担当した大稔［1995: 240］が「実際にそれが果たしてきた役割に比して、依然、なおざりにされてきた」とした状況から大きくは変わっていない。そもそもその項目自体も、宗教思想を扱う第 2 章ではなく、社会についての第 5 章に入れられており、信仰の十全の一部というよりも、民衆実践の社会的側面が主に注目されていたことがわかる。その後、新たに刊行された研究案内である『イスラーム世界研究マニュアル』では聖者と題した立項自体が見られないし［小杉ほか編 2008］、ごく最近に刊行された『中東・オリエント文化事典』では、「信仰」と題する第 4 章で立項されてはいるが、コラムとして半分の記述量を与えられているにすぎない［高橋 2020: 174］。

それでも 2002年刊行の『岩波 イスラーム辞典』では、東長らが担当した「聖者」の項目は通常の項目の倍以上の分量を与えられ［東長ほか 2002: 558–561］、赤堀、東長、堀川の編になる『イスラームの神秘主義と聖者信仰』が 2005年に刊行された［赤堀ほか編 2005］。この間に日本語で著

*　上智大学総合グローバル学部教授

され、「聖者」を題名に冠する単行本は私市の新書から始まって石原の編著まで十指に余り［私市 1996; 石原編 2021］、これを多いとみるか少ないとみるかは微妙だが、それなりの数の蓄積がなされたとはいえるだろう。

それら著作には東長による思想研究の展開、佐藤、私市、大稔らの歴史学からのアプローチ、鷹木、外川、菊田、石原らの民族誌などが含まれており［東長 2013; 佐藤 2001; 私市 2009; 大稔 2018; 鷹木 2000; 外川 2009; 菊田 2013; 石原 2021］、異なる分野で研究がそれぞれに進展したことをうかがわせる。しかし、それと同時に重要なのは、1997年に始まるいわゆる「イスラーム地域研究」プロジェクトを皮切りに[1)]、その活動の一環として、異なる分野の研究交流がなされ、共同研究が試みられ、分野間を超えて聖者信仰について何を探究すべきかの議論が積み重ねられてきたという事実である。

そこでの問題設定はスーフィズムと聖者信仰の関係のあり方を問うことを出発点にしており、その目的で提唱された赤堀の「スーフィズム・聖者信仰複合」の概念や東長による「スーフィズムの三極構造」をめぐる一連の論考、東長の三極構造論を受けてタリーカ論へと繋がる共同体的次元に注目した丸山の議論［東長 2002b; 2002c; 2013; Tonaga 2006; 赤堀 2005: 3–9; Maruyama 2015: 41–43］、さらには本特集自体もそのような枠組みの中で問いが立てられている。

本稿でも、改めて聖者信仰からみたスーフィズムやタリーカとの関係について論ずることもできるが、スーフィズムと聖者信仰とタリーカという本特集の全体像については、東長の総論に任せることとして、ここでは、スーフィズムやタリーカとの関係を考慮しながら、聖者信仰について研究を学際的に深めている場合に注目すべきいくつかの点を、四つの対比を順に取り上げるという形で論じていくこととする。

2. 神と聖者、崇拝と崇敬

聖者について論じる際に最初に考えるべき、そしてもっとも大きな対比とは、神と聖者の関係である。そこで注目すべきは神と聖者がいかに異なるのかという点だけではなく、両者には何が共通しているのかという点である。何事についてであれ、対比して捉えて両者の違いを明らかにするには、まず二つのものが並べ比較されることに意味があると了解されなくてはならず、両者をくくる何らかの枠組みが不自然なものではないと納得されなくてはならない。

たとえば、神は人間を超えた絶対者であり、聖者はいかに神に愛されようとも人間に留まる存在であると議論するためには、人ではない存在と人に留まっている存在がともに人々の尊崇の対象となっているという認識が必要である。そこから、聖者信仰を否定する人々のように、神を信ずることは正しく、聖者を信ずることは誤っていると言ってももちろんよいが、誤ってはいても信仰する者がいることを認めなければ当然、この対比は成立しない。

他方で、聖者信仰を認める立場――教義的に聖者信仰は正当と認める立場と、信ずるか否かに関係なく事実として聖者信仰が人々によって実践されてことを受け容れる立場のどちらもあるだろう――からすれば、神と聖者とのそれぞれについて、類似してはいても異なる信仰のありようを概念化しなくてはならない。そこで用いられるのが「崇拝（worship）」と「崇敬（veneration）」である。

1） 種目名に途中変更などがあったが、現在は科学研究費補助金（創成的基礎研究費）「現代イスラーム世界の動態的研究：イスラーム世界理解のための情報システムの構築と情報の蓄積」（研究代表者：佐藤次高東京大学大学院人文社会系研究科教授）［MEXT 科研費 JP09NP1301］として記録されており、1997 年度から 4 年間にわたり実施された。その研究は 2006 年度から 2015 年度にかけては大学共同利用機関法人 人間文化研究機構のプロジェクト「イスラーム地域研究」に継承された（<https://www.nihu.jp/ja/research/archive/areastudies/islam> 2021 年 12 月 18 日閲覧）。

元々はキリスト教の用語であり、聖者（saint）概念そのものと同様に［cf. 東長 2002a: 558］、イスラーム研究者はキリスト教研究における諸概念を流用している。なかにはそうした流用を問題とみる向きもあるかもしれないが、特定の概念を流用して広範囲に用いることが誤りであると一概に決めつけるのは早計である。特定の文化的文脈で生み出された概念が分析概念として有効化された例は、宗教関係に限ってもシャマニズムにせよファンダメンタリズムにせよ枚挙に暇がなく、むしろ重要なのはその有効性の射程と限界をどのように弁えるかという点にある[2)]。

崇拝と崇敬を区別することは信仰者にとっては、唯一神への信仰を聖者信仰が冒さないことの保証となる。これによって神と聖者は対立する存在ではなくなるだけでなく、神を聖者が補完する、ないしは神と聖者が相補的な関係を取り結ぶことが可能となる。補完や相補性は、対立の綜合という弁証法的な関係によってなされることを考えれば、このような展開は当然である。

しかし、「崇拝」と「崇敬」が言葉の上での区別だけではなく、どのように異なる心のありようであるかを一部の信仰者は自らに問うであろうし、研究者は当然に問わなくてはならない。もちろん、その違いを明確にすることはきわめてむずかしく、結局のところ言葉の上での区別にすぎないという見方もあるだろう[3)]。そうした見方を含めて、イスラーム聖者信仰について研究する者は「崇拝」と「崇敬」を区別することで何がわかるのかを自らに問うていかなくてはならない。

同時に、崇拝と崇敬に対応する概念が人々によって文献のなかや日常の暮らしのなかで使用されているか、使用されているとしたらそれはどんな概念かも慎重に検討しなくてはならない。崇拝について言えば、イバーダ（‘ibāda）がこれに対応するというのはかなり広範囲に妥当しそうだが、崇敬に当たる概念、つまり聖者に対する人々の心も持ちようや姿勢を示す特定の単語はなかなか一様には決まらないように思われる。自身の調査地であるエジプト西部砂漠での経験からはイフティラーム（iḥtirām）が挙げられるが［赤堀 2021: 101］、これが他の時代や地域でも妥当であるかは明らかでない。そもそもそれが明示的に言語化されるかどうかも含めて、分析概念と現地の概念の間を往き来することによって、神と聖者の対照性をさらに深く理解することができるだろう。

また、崇拝される神、崇敬される聖者の対に、崇拝し崇敬する主体としての人を対置することで形作られる三者間関係についてもさらに検討しなくてはならない。そうした三者関係は、古くからレヴィ＝ストロースが「料理の三角形」、リーチが「プラス、マイナス、ゼロの関係」として論じてきた問題とも関連付けて考えてみることで［レヴィ＝ストロース 1968: 61; リーチ 1985: 3–4］、イスラームについて、あるいは一神教についてより興味深い気付きをもたらしてくれるかもしれない。

3. 預言者と聖者、啓示と奇蹟

神と聖者と人の三者関係について、聖者が神と人の間を取りなす媒介的な存在であることはこれまでにも様々な形で論じられてきた［赤堀 2004: 235–240］[4)]。そのなかでは、神と人の関係の全般を交換論の視点から捉え、そのなかで媒介としての聖者のありようを位置づけようとした大塚の論考は［大塚 1986］、赤堀が「スーフィズム・聖者信仰複合論」を考え始める大きなきっかけとなっ

2）いささか横道にそれるが、スーフィズム、聖者信仰、タリーカという本特集の三つの題材が、アラビア語の概念に「イズム」を付したもの、現地の概念を直接には参照せずキリスト教から借用したもの、アラビア語の概念のままという三者三様の形をとっている点は、対象の概念化という点で一考に値する。

3）キリスト教についての最近の検討としては、たとえばレポヤルヴィの論考を参照［Lepojärvi 2015］。

4）預言者と聖者以外に、同じく神と人を媒介する使徒についてはここでは措いておく。また、スーフィズムについて、弟子を真理たる神へと導く先達たるスーフィーの導師もまた媒介として捉えることが可能だが、これについてもここでは論じない。

たという点で、とくにここで言及しておきたい。また、媒介としての聖者は日常と非日常の間に立つ存在――ファン・ヘネップの『通過儀礼』以来［ファン・ヘネップ 1995 (1909)］、人類学の儀礼論で盛んに検討を加えられてきた境界的存在――として繰り返し分析されてきており、赤堀もそのような観点からエジプト西部砂漠のベドウィンの聖者信仰について論じたことがある［赤堀 1995: 114–119］。

こうした媒介的境界的存在としてのイスラームの聖者について考えるときに、重要な対比は預言者と聖者の間に設定できる。ここでもまた重要なのは両者がともに神と人の間を媒介する存在であるという共通性をまず押さえることであり、次いで、では預言者と聖者はどのように媒介として異なるのかということが問われることになるが、この問題を正面から論じた論考［e.g. Singh 2010］は多くはない。両者の共通性についてはたとえば神という超越的な存在が人から隔絶してしまわないために、神を人へとつなぎ止める者といった理解が可能であり、差異について言えば認識できる形で神の存在を示すのに、預言者は啓示によってこれをなし、聖者は奇蹟によってなすという点が挙げられる［赤堀 2004: 242］。

ギアーツやゲルナーはしばしば啓示のイスラームと聖者のイスラームを対比してみせるが［Geertz 1968: 64–75; Gellner 1969: 127–138］、人によって左右されない文字的伝統と、人によって体現される信仰を対比する意図はわかるものの、啓示もまた預言者という人を介して示される点を見逃してしまっている。対照性はむしろ預言者と聖者の間に立てられ、両者が媒介するものとして、啓示という言葉と奇蹟という現象が対比的に置かれると考えるべきであろう。さらに言えば、啓示として媒介された信仰の形は、伝承（ハディース ḥadīth）として継承され言説的伝統（discursive tradition）へと組み込まれ、これに並行する形で奇蹟はそれを引き起こした恩寵（バラカ baraka）が継承され何らかのハビトゥス（habitus）を生み出すといった対照が可能かといった検討も意味があるかもしれない［Asad 1986; ブルデュー 1993］。

預言者はおしなべて聖者でもあって、聖者はしかし皆が預言者であるわけではないという考え方からすれば、両者の間には包含関係があり、またムハンマドが預言者の封印であることから、預言者と聖者の媒介のありようの違いは、時間的な区切りのあるものとして考えることも可能である。そうした点を含めて、現地調査のなかで、あるいは同一の史料のなかで預言者と聖者がどのように語られるのかに意識的に注目してみる価値はある。たとえば、祈念の際に、神、預言者、使徒がどのように言及されるのかに注目してみるのは、興味深い知見をもたらしてくれるかもしれない。同じように祈願文のようなものについて同様の試みを歴史学者がなすことが可能なら、ぜひその結果を知ってみたいと思う。

4. 聖者と聖遺物、ヒトとモノ

過去 10 年ほどにわたり、「モノの人類学」と称されるような、ヒトがモノとどのように関わっているのかに注目する試みが多様な形で人類学では展開されてきた［e.g. 床呂・川合編 2011; 2019; 森田 2012］。もちろん「物質文化」研究の名の下にモノに注目する研究は古くからあり、その一方そうした研究との決別を謳うそれらモノの人類学が、それまでの研究との差異化をきちんと説明したかといえばやや心許ないし、モノの人類学が一つの明確な理論を構築したわけでもない。むしろ、ヒトが自身の身体を有し、その身体の延長としての道具を含め、モノと関わりあって生きていることに注目し、認知論へ強く傾いていた人類学を揺り戻そうとする側面がモノの人類学には強いと思

わされることも多い[5)]。

だが、聖者と、聖者に与えられた恩寵を継承し伝えていく聖遺物との関係を、ヒトとモノとの関わりという観点から見ていくことは、もちろん重要である。「聖遺物」概念もまたキリスト教由来でイスラームに適用されるようになった概念であり、近年では、アーサール・ムカッダサ（āthār muqaddasa）といった概念がアラビア語などでも見られるが、これが古くから自前の概念として使われてきたようには思われない。しかし、聖遺物に相当するモノを、歴史上、とくにオスマン朝やムガル朝の支配者たちが収集してきたとする記述は、イスラームの聖遺物を扱う著作ではしばしば見られ［e.g. Aydın 2010: 44］、概念化の有無を別として、聖遺物に相当するモノへの信仰は古くから存在してきたといってよいだろう。研究自体も聖者信仰について論ずるのに付随して言及されることはあっても、これを中心的な主題とした研究はここ 20 年ほどの間に見られるようになったばかりであり、しかも日本人による研究以外は美術品の観点から聖遺物を扱った研究が大半である［e.g. 大稔 1999; 小牧 2002; Komaki 2007; Aydın 2001; Shaw 2010］。

キリスト教の聖遺物とイスラームの聖遺物を比較した場合に、前者には聖人の遺骸とその一部が重要な位置づけを与えられているのに対し、後者では一般に忌避されるといった違いがある。また聖遺物と並んで前者では聖画像（カトリックの立像を含む）が重要な役割を果たすのに対し[6)]、後者では聖者廟が聖性を帯びたモノであると同時に空間として、すなわち聖性を帯びた場、人々の参集する地、祭礼の催される所として重要な役割を果たす。これらを見込んで聖者信仰との関連を考えていくことも重要であるが、ここでは指摘するに留めて、これ以外に考慮すべきいくつかのことがらに触れることとする。

聖者の聖性が聖者廟を含む聖遺物に継承されるというときに、注目すべき重要な視点は継承と同時にどのような質的変化が生じるかをみることにある。ハディースのような言説の伝承にせよ、恩寵や聖性と呼びうるような形ないものの継承にせよ、そこには継続と同時に変化をみることが肝心であると言い換えてもよいだろう。

そうした変化を扱うには様々な取り組みが可能であろうが、たとえば、「生ける聖者」と「死せる聖者」の問題が一つの例となる。これまでにも聖者の死後、時が経つほどに聖者をめぐる奇蹟譚が増殖するといったことは注目されてきた［e.g. 佐藤 2001: 86–109］。これは死んでしまったが忘れ去られずに人々に崇敬され続けられる聖者ほど、人々によってその事績が自由に操作できるものとなっていくためと説明できようが、言い方を換えれば、それはヒトがモノとなっていく過程であると看て取ることもできる。さらに踏み込めば、キリスト教とは異なり生ける聖者と呼びうる者がいないわけではないが［赤堀 1995:105］、大半の場合に聖者はすでに死んでおり、その意味ではイスラームで聖者は、元来はヒトであったがモノへと接近していった結果生まれるということもできるだろう。

聖者に与えられた恩寵は聖遺物を介して継承されるだけではなく、聖者の末裔へと伝えられている場合もしばしばあり［Akahori 2004］、ヒトへの継承とモノへの継承を対比的に検討することも可能である。その際、スーフィー聖者についてはしばしば血統による聖性の継承と道統による流派の継承が渾然一体となりがちだが［e.g. Eickelman 1976］、それはそれで聖者信仰とスーフィズム

5）ヒトによって作りなされたモノに留まらず、ヒト以外の生き物へと目を向けた議論が、たとえばマルチスピーシーズ論へと展開したといえるが［インゴルド 2020; 奥野 2021］、これもまた従来の文化と自然をめぐる議論をどのように決算したかが現時点で明確になっているわけではない。

6）古くからの人類学上の区別を応用すれば、聖遺物が接触呪術の論理に依拠しているのに対して、聖画像は類感呪術の論理に依拠しているという説明が可能である。

の関係を考える際のよい材料となるだろう。

キリスト教においては、聖画像、とりわけ立像があたかも生きて意志あるものかのように語られる場合があり［古沢 2021: 184–193 et al.］、イスラームにもこれに対応するようなモノがヒトへと接近する事例がみられるか、私自身の不勉強で何ともいえないが、聖者の物象化に対応する聖遺物の人格化のような論理を、事例に基づきつつ検討することができれば、この対比はさらに聖者信仰について有効な視点をもたらしてくれるだろうし、ヒトとモノの境界を探索する点でモノの人類学にとっても貢献をなすだろう。

5. 聖者と恩寵、器と中身

聖者と聖遺物の間での聖性の継承について、継承される何らかの形ないものについて与えられる名称が「恩寵」である。恩寵もまたキリスト教に由来する概念であり、アラビア語のバラカ（baraka）が恩寵に対応すると一般には捉えられている。ここでは、形なき恩寵に対してそれを宿す聖者および聖遺物のような形あるものを、中身と器になぞらえて章題としたが、この表現が正しいかどうかは現時点ではやや確信がない。

聖者を介して神と人をつなぐ概念として重要なバラカは、聖者信仰に関する論文の多くで言及されているが、それ自体を大きく取り上げて主題として扱った論文は多くない。古典として知られているのはシルオドやデンファーの論文であり［Chelhod 1955; Denffer 1976］、日本語では人類学の鷹木や齋藤、歴史学の私市の論考がある［鷹木 1988; 齋藤 2010a; 私市 2005］。

そして、シルオドやデンファーの議論が概形的であるのに対して、日本人研究者による論考は、聖者信仰との関係に力点を置き、本稿の主題にとって多くの示唆に富んでいる。鷹木によるバラカとマナを比較する議論は、人格的な霊概念を伴うアニミズムと非人格的な力であるマナイズムをめぐる議論を受けて、バラカ概念を一般化するのに今も有用だし、バラカにはマナのように災厄をもたらす力として働くという側面が欠けているという指摘にもうなずかされる。他方、私市の議論で、元来は唯一神と結びついていたわけではなかったバラカが、神を源泉とする形に限定されるかをめぐって、時代により振り子のように揺れるという指摘は［私市 2005: 101–103］、ゲルナーの振り子理論と考え合わせるとさらに検討を深められそうである［Gellner 1969］。他方で、私市がいうバラカの「精神的なものに限定されることもなく，物質的な概念をも意味していた」という主張については［私市 2005: 79］、バラカそのものが独自の実体をとるという話ではないので、バラカとそれが宿るモノとの間での結合の分かちがたさと解することができるだろう。

齋藤の論考は、恩寵が聖者信仰に限定された概念ではなく、はるかに広範囲に人々の生活のなかで運用されている概念であることを指摘している点で重要である［齋藤 2010a: 27–29］。人々の日常の信仰生活の全般に目配りしようとするときには、聖者よりもバラカの方が基盤となるものであり、とりわけ人に聖性を擬することに人々が現実味を感じられなくなってきている今日において、聖者の領域は確実に狭まっている。その一方、そのことは聖者と恩寵の関わりについて、とりわけそれを、他のモノや場が恩寵と関わる様相との共通性と差異の点から論じる必要はないということを意味しているわけではない。聖者信仰を主題とするという立場から恩寵について論じることと、恩寵の働きを研究する立場から、その一部である聖者信仰との関わりを見ていくことは、充分に両立するし、両立させなくてはならない。

また、キリスト教との比較の視点からすれば、恩寵（grace）とそれを与える行為としての祝福（blessing）の区別、そして祝福を与えうる人間としての聖職者といった捉え方について、イスラー

ムではどのような対応する構図が描き出されるかについて検討してみることもよいかもしれない。イスラームには生きている聖者がおり[7]、その点からすると、イスラームの聖者とキリスト教の聖職者の間にも対比が成立する余地はありそうである。

6. おわりに

ここまでイスラームの聖者信仰をめぐる研究の今後について考えるという本稿の役割に沿って限られた紙数ながら論じてきた。まず指摘したのは、この分野が多くの概念をキリスト教の聖人崇敬の研究から借りており、そのことを忌避するのではなく、借用することの効果と限界を見定めていく必要がある点である。

併せて、個別の事例研究に留まらず、理論的な探究がなされ、また学際的な共同研究が発展していくための観点の一例として、神と聖者、預言者と聖者、聖者と聖遺物、聖者と恩寵という、聖者の存在のありように関わる四つの対比を軸とした研究の方向性を示してきた。もちろん、これ以外にも、モロッコにおける聖者信仰に関わる事例研究などを見ていると［e.g. Crapanzano 1973］、聖者と精霊といった対比も検討に値しそうであるし、対比される 2 項の一つに聖者を充てない形であれば、礼拝と祈念、巡礼と参詣といった対比の立て方も、イスラームの聖者信仰研究には意味がある。

ここで念のために断っておくが、そうした議論は事例研究に対して過度の一般化や図式化を迫るものではない。思想研究であれ、歴史学であれ、人類学であれ、研究の基本は個別の事例に密着した精細な研究にあることはいうまでもない。

ただし、その一方で、事例研究の重要性を主張することが一般化、理論化への契機を欠いたままに終わるのは望ましいことではないとも言わなくてはならない。まず、きちんとした事例研究をなすべしということ自体は間違っていなくても、事例研究をただただ積み重ねれば、やがてそこから何らかの理論が生まれると考えるのは、素朴で楽観的にすぎる。すべからく研究は個別性と一般性の往還のうちに何ごとかが達成されるべきであり、個別性をもって潔しとすることは、とりわけ人類学にとってはありえない姿勢である。そして、異なる分野の間の協働が企図されている研究――イスラームの聖者信仰に関する研究がまさにそうである――については、そうした一般化への意志を常に持ち続けることは、人類学における一般化の大切さとはまた別の意味で、共同研究を機能させるのに欠かすことができない。

本稿では聖者信仰を研究する上で、聖者と対比しうる四つの題材について論じてきたが、聖者信仰の側から見た場合に周辺にあるそれらを議論の中心に据えた研究からは、聖者信仰の側が取り扱うべきことがらの一つにすぎないということにも注意する必要がある。恩寵についてはすでに齋藤の論考を紹介したが［齋藤 2010a］、たとえばモノの人類学との関わりからいえば、先駆的な研究であるスターレットの宗教消費財についての論考は聖者信仰にまったく言及しておらず［Starrett 1995］、宗教消費財の研究が聖者信仰と結びつくのはごく一部の事例についてであるにすぎない。イスラームについて、モノの人類学の流れを汲んだ研究を行っている二ツ山も強く聖者信仰にこだわった研究を展開しているわけではない［二ツ山 2016; 2021］。

ここには聖者信仰を民衆的な信仰の典型として扱うことに関わる問題がある。そして、これについてはそもそも民衆的な信仰に典型があるという問いの前提が不適切であるとしか答えようがな

7）それを聖者と認めることを避けるために、生きている人間には saint の語を使わず、holy man を使う場合も見られる［e.g. Abu-Lughod 1986: 102, 188; Melchert 2020: 108–124］。

い。聖者信仰には様々な形での接近が可能で、とりわけ人類学者にとってはイスラームの信仰と実践をめぐって取り組みやすい主題であるのは事実であるが、その一方で、人々の日常的信仰実践が聖者信仰に収斂するかのように論じるのは明らかに間違っている。

だがまた同時に、聖者信仰が確固とした一つの主題として成立しうることを否定することも不自然な理解をもたらす。たとえば、堀内はかつて、「聖者」の用語を廃して「偉人」と呼ぶことで、聖者が通常の人とは違う特殊な研究対象となることを避けようとしたが［堀内 1999］、その論理は聖者概念の外延の広さを確保しようとして対象を見失わせるものであったし、「異人」としての聖者のありようを排除する議論でもあった。また、齋藤［2010b: 62–66］は、バラカをめぐる議論［齋藤 2010a］の延長上に、聖者信仰の「本質化」の回避を訴えたが、聖者信仰研究が聖者廟参詣や聖者祭といった制度化した儀礼などに過度に注目することへの危惧は了解できるものの、先行する研究は日常のなかに営まれる聖者信仰、あるいは聖者信仰に連接する信仰実践があることを否定しているわけではなく、むしろそのような営みを細やかに検討した齋藤の論考は、先行する聖者信仰の研究者たちから歓迎されるものなのではないだろうか。たとえばゲルナーの P 的症候群と C 的症候群が極性を表現するものであって、振り子のように揺れ動く――つまり中間的な様相が無限にある――という考え方が論文題にも明確に示されているにもかかわらず［Gellner 1969］、そこに「本質化」を固定的な形で齋藤がみる視線はまさに齋藤自身のうちから生み出されているようにもみえる［齋藤 2010b: 64–66］。対比をめぐった一般論として述べたように、あることを弁別することは弁別されたものの間を遮断することではない。

何らかの研究枠組みの設定、理論化、図式化がなされたのちに、それらの問題点を指摘することが、そうした理論や図式がもたらした知見までをも無効にするとしばしば考えられがちであることは、私には不思議に思われる。いうまでもなくありとあらゆる枠組み、理論、図式は批判され吟味されるべきである。しかし、吟味はそれらの射程を見定めるために行われるべきであり、それらを捨て去って新たなものに乗り換えるためではない。研究は流行り廃りで行われるものでなく、19 世紀の進化論からさえ、私たちの手に残った知見はあるし、構造主義が機能主義を否定したわけでも、1990 年代の反省的人類学によって過去の人類学が全否定されたわけでもない。簡単に言えば、私たちがイスラームの聖者信仰を研究することの意味は、ひたすら事例研究を蓄積することでもなく、様々な理論をとっかえひっかえすることでもなく、聖者信仰について考えられうる多種多様な接近方法から調べ考えることが、イスラームについて、あるいは宗教について、さらにヒトについて、どんな知見をもたらすかを問うと同時に、聖者信仰の研究によってはみえないこともまた明らかにしていくことでもあるのである。

謝辞

本稿は JSPS 科研費 JP16H01904, JP16H03531, JP19H00564 の研究成果の一部をなす。本稿の執筆に先立つ研究発表では、私市正年氏（上智大学名誉教授）他に有益なご指摘をいただいた。感謝申し上げる。

参照文献

赤堀雅幸 1995「聖者が砂漠にやってくる――知識と恩寵と聖者の外来性について」『オリエント』38(2), pp. 103–120.

――― 2004「イスラームの聖者と聖者のイスラーム」『宗教研究』78(2), pp. 229–250.

――― 2005「スーフィズム・聖者信仰複合への視線」赤堀雅幸・東長靖・堀川徹（編）『イスラームの神秘主義と聖者信仰』東京大学出版会, pp. 1–19.

――― 2021「名誉は暴力を語る――エジプト西部砂漠ベドウィンの血讐と醜聞」田中雅一・嶺崎寛子（編）『ジェンダー暴力の文化人類学――家族・国家・ディアスポラ社会』昭和堂, pp. 83–103.

赤堀雅幸・東長靖・堀川徹（編）2005『イスラームの神秘主義と聖者信仰』東京大学出版会.

石原美奈子（編）2021『愛と共生のイスラーム――現代エチオピアのスーフィズムと聖者崇拝』春風社.

インゴルド, ティム 2020『人類学とは何か』（奥野克巳・宮崎幸子訳）亜紀書房.

大塚和夫 1986「イスラームにおける『現世利益』――交換論的視点からの一試論」『オリエント』29(1), pp. 84–95.

大稔哲也 1995「『聖者』と『聖者崇拝』」三浦徹・東長靖・黒木英充（編）『イスラーム研究ハンドブック』栄光教育文化研究所, pp. 240–248.

――― 1999「中世エジプト・イスラム社会の参詣・聖墓・聖遺物」歴史学研究会（編）『巡礼と民衆信仰』青木書店, pp. 224–261.

――― 2018『エジプト死者の街と聖墓参詣――ムスリムと非ムスリムのエジプト社会史』山川出版社.

奥野克巳 2021『絡まり合う生命――人間を超えた人類学』亜紀書房.

菊田悠 2013『ウズベキスタンの聖者崇敬――陶器の町とポスト・ソヴィエト時代のイスラーム』風響社.

私市正年 1996『イスラム聖者――奇跡・予言・癒しの世界』講談社.

――― 2005「マグリブ中世史料にみえる變化と聖者崇拝の發展」『東洋史研究』64(1), pp. 74–103.

――― 2009『マグリブ中世社会とイスラーム聖者崇拝』山川出版社.

小杉泰・林佳世子・東長靖（編）2008『イスラーム世界研究マニュアル』名古屋大学出版会.

小牧幸代 2002「インド・イスラーム世界の聖遺物信仰――『遺されたもの』信仰の人類学的研究に向けて」『人文学報』87, pp. 103–143.

齋藤剛 2010a「バラカ概念再考――モロッコをフィールドとした人類学的ムスリム聖者信仰研究の批判的検討」『イスラム世界』74, pp. 1–32.

――― 2010b「聖者信仰の『本質化』を超えて――モロッコにおけるフキーの治療の事例から」『アジア・アフリカ言語文化研究』80, pp. 61–96.

佐藤次高 2001『聖者イブラーヒーム伝説』角川書店.

鷹木恵子 1988「アラブ・ムスリムにおけるバラカについて――マナとの比較から」『筑波大学地域研究』6, pp. 245–258.

――― 2000『北アフリカのイスラーム聖者信仰――チュニジア・セダダ村の歴史民族誌』刀水書房.

高橋圭 2020「聖者」鈴木董・近藤二郎・赤堀雅幸（編）『中東・オリエント文化事典』丸善出版, p. 174.

東長靖 2002a「聖者とは」大塚和夫・小杉泰・小松久男・東長靖・羽田正・山内昌之（編）『岩波 イスラーム辞典』岩波書店, pp. 558–559.

――― 2002b「神秘主義イスラームの現在――スーフィズムの三層構造論をもとに」『思想』941 pp. 119–135.

――― 2002c「スーフィズムの分析枠組」『アジア・アフリカ地域研究』2, pp. 173–192.

――― 2013『イスラームとスーフィズム――神秘主義・聖者信仰・道徳』名古屋大学出版会.
東長靖・私市正年・赤堀雅幸・小牧幸代 2008「聖者」大塚和夫・小杉泰・小松久男・東長靖・羽田正・山内昌之（編）『岩波 イスラーム辞典』岩波書店, pp. 558–601.
外川昌彦 2009『宗教に抗する聖者――ヒンドゥー教とイスラームをめぐる「宗教」概念の再構築』世界思想社.
床呂郁哉・川合香吏（編）2011『ものの人類学』京都大学学術出版会.
――― 2019『ものの人類学 2』京都大学学術出版会 .
ファン・ヘネップ, アルノルト 1995 (1909)『通過儀礼』（綾部恒雄・綾部裕子訳）弘文堂.
二ツ山達朗 2016「イスラームにおける巡礼と聖地の商品化――チュニジアにおける室内装飾具の事例から」『観光学評論』4(2), pp. 195–210.
――― 2021「世界は神とつながるモノにあふれている――マテリアリティとイスラーム」西尾哲夫・東長靖（編）『中東・イスラーム世界への 30 の扉』ミネルヴァ書房, pp. 130–139.
古沢ゆりあ 2021『民族衣装を着た聖母――近現代フィリピンの美術、信仰、アイデンティティ』清水弘文堂書房.
ブルデュー, ピエール 1993『資本主義のハビトゥス――アルジェリアの矛盾』（原山哲訳）藤原書店.
堀内正樹 1999「現代モロッコの廟参詣――『聖者』を『偉人』とする提案を添えて」歴史学研究会（編）『巡礼と民衆信仰』青木書店, pp. 319–348.
森田敦郎 2012『野生のエンジニアリング――タイ中小工業における人とモノの人類学』世界思想社.
リーチ, エドマンド 1985『社会人類学案内』（長島信弘訳）岩波書店.
レヴィ＝ストロース, クロード 1968「料理の三角形」（西江雅之訳）『レヴィ＝ストロースの世界』みすず書房, pp. 41–64.
Abu-Lughod, Lila. 1986. *Veiled Sentiments: Honor and Poetry in a Bedouin Society*. Berkeley: University of California Press.
Akahori Masayuki. 2004. “Partly Saints and Partly Bedouins: The Murābiṭīn People among the Bedouins of the Western Desert of Egypt,” *The Journal of Sophia Asian Studies* 22, pp. 75–86.
Asad, Talal. 1986. *The Idea of Anthropology of Islam*. Washington D.C.: Center for Contemporary Arab Studies, Georgetown University.
Aydın, Hilmi. 2001. “Sacred Holy Relics,” *Arts of Asia* 31(6), pp. 77–87.
———. 2010. *The Sacred Trust: Pavilion of the Sacred Relics: Topkapı Palace Museum, Istanbul*, 2nd ed., ed. by Talha Uğurluel and Ahmet Doğru. Clifton, NJ: Tughra Books.
Chelhod, Joseph. 1955. “La baraka chez les Arabes ou l’influence bienfaisante du sacré,” *Revue de l’histoire des religions* 148(1), pp. 68–88.
Crapanzano, Vincent. 1973. *The Ḥamadsha: A Study in Moroccan Ethnopsychiatry*. Berkeley: University of California Press.
Denffer, Dietrich von. 1976. “Baraka as Basic Concept of Muslim Popular Belief,” *Islamic Studies* 15(3), pp. 167–186.
Eickelman, Dale F. 1976. *Moroccan Islam: Tradition and Society in a Pilgrimage Center*. Austin: University of Texas Press.
Geertz, Clifford. 1968. *Islam Observed: Religious Development in Morocco and Indonesia*. Chicago: The University of Chicago Press.

Gellner, Ernest. 1969. “A Pendulum Swing Theory of Islam,” in Roland Robertson (ed.), *Sociology of Religion: Selected Readings*, Harmondsworth: Penguin, pp. 127–138.

Komaki Sachiyo. 2007. “Politics, Poetics and Pop in the Succession of Holy Relics: Examples from South Asian Muslim Society,” *Orient* 42, pp. 71–93.

Lepojärvi, Jason. 2015. “Worship, Veneration, and Idolatry: Observations from C. S. Lewis,” *Religious Studies* 51(4), pp. 543–562.

Maruyama Daisuke. 2015. “Redefining Sufism in Its Social and Political Contexts: The Relationship between Sufis and Salafis in Contemporary Sudan,” *Kyoto Bulletin of Islamic Area Studies* 8, pp. 40–56.

Melchert, Christopher. 2020. *Before Sufism: Early Islamic Renunciant Piety*. Berlin: De Gruyter.

Shaw, Wendy M. K. 2010. “Between the Secular and the Sacred: A New Face for the Department of the Holy Relics at the Topkapı Palace Museum,” *Material Religion: The Journal of Objects, Art and Belief* 6(1), pp. 129–131.

Singh, David Emmanuel. 2010. “The Prophet and the Saint: Exploring Tensions and Possibilities for Dialogue between Faiths,” *Journal of Ecumenical Studies* 45(1), pp. 61–78.

Starrett, Gregory. 1995. “The Political Economy of Religious Commodities in Cairo,” *American Anthropologist* 97(1), pp. 51–68.

Tonaga Yasushi. 2006. “Sufism in the Past and Present: Based on the Three-Axis Framework of Sufism,” *Annals of Japan Association for Middle East Studies* 21(2), pp. 7–21.